

## 北条氏の天下を確立した 宝治合戦

竹村 紘一

宝治合戦とは宝治元年（一二四七）五月～六月五日にかけて行われた北条氏・安達氏と三浦氏との戦いである。この戦いで北条氏は三浦氏とそれに与した千葉氏を滅ぼしたのであった。

### 北条氏も恐れた三浦氏の実力

北条氏はこれまで、梶原氏・比企氏・畠山氏・和田氏など前途の障害になりそうな幕府創業の功臣を巧みに滅ぼしてきたが、北条氏専権を脅かしそうな有力豪族は、まだいくつかは健在であった。その有力豪族の中で、当時最も繁栄を誇っていたのは、三浦氏であった。

「自分は既に正五位下となり、その他一族も多く官位を授かっている。その上数ヶ国守護を兼ね、一族の管掌する荘園も数万町に及ぶ。まさに盛運の極みといってよく、これでは他人から讒訴されるのも無理からぬことだ」と当主三浦泰村も、そう自認している程である。しかも三浦氏は、決してこのような盛運に驕ることなく、北条氏と協調する事に努め、幕政に尽力してきた。

だが、「讒訴されても仕方がない」と自認するその強大な勢力は、やがて次第に若い執権北条時頼を圧迫するようになり、時頼はいつかこの雄族の討滅を願うようになった。そしてその時、時頼の意を体して表だって動いたのは、時頼の母・松下禪尼の父である有力御家人の安達景盛であった。景盛は父・盛長が頼朝の創業の功臣であったことから頼朝の引き立てを受けて幕府の重臣として活躍、娘の松下禪尼は北条時氏の正室となり、幕府の第四代執権・北条経時、第五代執権・北条時頼等の子女を生んだ。景盛は執権となった時頼の外祖父として幕府内の強い勢威を築いたのである。

### 謀反の挑発

宝治元年五月、鶴岡八幡宮の鳥居の前に、「三浦泰村は厳命に背いたため。近々誅罰されるとのことだ」

そんな文面の立て札が立てられた。それが皮切りで、以後、しばしば三浦一族の叛逆を言いふらす流言が鎌倉を飛び交うようになった。もちろん、安達景盛らの挑発作戦であり、さしあたり三浦氏を討つ理由のない彼らは、こうして三浦氏を窮地に追いつめ、三浦氏側から挙兵してくることを期待した。

だが、泰村はどこまでも慎重であった。時頼が詰問の使者を差し向けても、巧みに受け流し、ボロを出さない。その為、時頼もとうとう三浦氏誅罰をする気は毛頭ないと、書面で泰村に申し送らねばならない羽目になった。

しかし、それはわざと見せた隙だったのかもしれない。それというのも、三浦氏が時頼の書状を見て一安心しているところへ、安達景盛が大軍を率いて奇襲攻撃をかけたからである。

事ここにいたって、泰村は全てを諦めた。今仮にこの場を逃れても、時頼の気持ちが変わらない限り、いずれは滅ぼされるのである。そこで泰村は頼朝の墓所である法華堂に籠もり、頼朝の絵像を前にして一族五百余人と共に自害する道を選んだ。

その時に妻の縁により三浦氏に味方し滅んだ毛利季光について述べておきたい。

## 戦国毛利氏の先祖となった毛利季光

毛利氏は、系図によれば天徳日命あめのほひのみことを祖としている。野見宿禰のみのすくねなどを経て音人おとんどに至り大江氏を称するようになったと伝えられる。

大江広元は藤原光能の子、養子先の大江維光を実父とする説もある。母が中原広季に再嫁し、長く中原氏を名乗るが、建保四年に大江姓に復した。学問・法律に通じ、初め朝廷に出仕したが、元暦元年、鎌倉に下向。源頼朝の信任を得、同年十月に公文所別当、建久二年からは政所別当となった。数多くの政策に関与し、特に文治元年(一一八五)、守護・地頭の設置を進言。また、朝廷との政治的折衝に手腕を振るい、上洛することもたびたびであった。

頼朝没後も、北条氏の執権政治の確立に貢献。将軍源頼家の修禅寺幽閉事件、比企能員、畠山重忠、平賀朝雅、和田義盛などの追討にも参画した。建保五年出家、法名は覚阿。この頃は眼病を患い、「黒白を分たざる」有様であったという。

承久の乱(一二二一)に際しては敢然として京都に攻め上るべきことを主張した。これらの功によって、相模国毛利荘・周防国島末荘・肥後国山本荘・伊勢国来真荘などの所領を与えられた。広元は頼朝の信任が厚く枢機に関与したが、頼朝死後は、中立を装いながらも北条氏との連携を深め幕政に重きをなした有能にして処世に長けたしたたかな人物とされている。

季光は建仁二年、大江広元の四男として生まれた。建保四年には、父の広元が中原姓から大江姓に復姓する。季光も大江姓となり従五位下に昇進した。建保七年、季光は出家して「西阿」と号するが、これは将軍実朝が殺害されたことを悼んでのことであるといわれている。季光は、やがて「毛利」の姓を名乗ることになる。季光が名乗った「毛利」は、現在の厚木市域から津久井方面にかけて開かれた荘園名であり、平安時代末期から鎌倉時代にかけて森冠者(陸奥六郎義隆)・毛利太郎景行などの武将名が史料に登場する。季光は、「和田義盛の乱」で滅んだ毛利氏や愛甲氏に代わって、毛利庄の領有権を得たことによって、自らの姓を「毛利」と改めたのであろう。

承久の乱には幕府軍の主力東海道軍に属し、木曾川渡河では最右翼の鶴沼の渡(岐阜県各務原市)へ向かう大将となってこれを突破したのをはじめ数多くの軍功を挙げた。京都占領直後の戦後処理の評議にも北条泰時・同時房・三浦義村とともに参画した。戦功により安芸国吉田荘地頭職を与えられた。順調に推移していた人生であったが思わぬ陥穽が待ち受けていた。北条氏が三浦氏を滅ぼさんとして画策した宝治合戦が始まるのである。

合戦が勃発した時、執権政治体制下における重要政策の評議決定にあたる関東評定衆の一人となっていた毛利季光は、幕府方に馳せ参ずべく準備を整えていた。季光の女子のうち、一人は北条時頼の妻となっていたし、幕府体制の中枢に身を置く自分の立場を考えれば当然の行動であった。しかし、いざ出陣の時になって、事態は思わぬ方向へ急転回する。季光の妻が、出陣しようとする季光の鎧の袖を引き止め、「若州(三浦泰村)を捨て、左親衛(北条時頼)の御方に参ずるの事は、武士の致すところか、はなはだ年来の一諾を違(ちが)えおわんぬ。なんぞ後聞を恥ざらんや」と、三浦氏に味

方することを強く迫ったのである。

妻の懇請を容れて三浦方に付いた季光は、源頼朝の墓所がある法華堂で、一族と共に自刃して果てるのである。享年四十六歳。

有力御家人三浦氏から妻を迎えたことが、逆に季光の運命を変えた。専修念仏者であった西阿は、法華堂に集まった諸衆に勧め、一仏浄土の因を願って、法事讃を唱え上げたと伝えられる。血縁を重んじる当時の武士の状況が良く判る話である。

『吾妻鑑』には季光の子息たち「兵衛大夫光廣・次郎蔵人入道・三郎蔵人」と吉祥丸の一族が「自殺・討死」と記されているが、一族の中でただ一人、四男・経光のみは越後佐橋荘に在国していたため、処分を免れた。年来、北条氏に忠実であった季光の苦衷の決断を察した時頼の情けある配慮であったのであろう。経光には、越後国佐橋庄と、安芸国吉田庄の地頭職が安堵される。経光の所領のうち、嫡男・基親が越後北条を相統し、越後毛利氏の祖となる。戦国期に上杉氏に従って活躍する北条、安田、毛利などの諸氏がこの流れを汲む。安芸吉田の毛利氏から、戦国大名として名を馳せる一代の梟雄とも名将とも云うべき毛利元就が出るのである。